日本顎咬合学会の叡智を学ぶ 1

パーシャル・デンチャーはまず歴史から学ぶべき！

鈴木 尚 Hisashi Suzuki
(ナオ歯科クリニック)

はじめに

日本のパーシャル・デンチャーがどの様に変遷してきたのか？ ということに、若い先生方はあまり興味がないうように思われます。しかし本当に患者さんに寄与するパーシャル・デンチャーを学び、提供しようとするなら、日本における過去から現在に至るパーシャル・デンチャーの臨床での変遷を認識し、理解することから始めなくてはなりません。それによって欠損補綴の問題点が明らかになり、解決のために何処へ向かえばよいのか？ が理解できると思われます。

残存組織の保護

パーシャル・デンチャーの目的は、古くから言われているように機能の回復と残存組織の保護であることは間違いありません。材料や手法の進歩により、機能（咀嚼・発音・審美など）の回復はほぼ満足のいく水準に達していると思います。しかしながら、もう一つの目的である

残存組織の保護はあまり大きく取り上げられませんでした。特に支台装置が設定される支台歯は最も大切な残存組織です。この歯が失われるとパーシャル・デンチャーはほぼ壊滅的な影響を受けることになり、原則使用することはできません。

支台装置の本質と変遷

日本におけるパーシャル・デンチャーの変遷は支台装置の変遷と言っても過言ではないでしょう。長い間義歯床を口腔内につなぎとめる役割が重視されて名称もほぼ「維持装置」と呼称されてきました。そのために多くのクラスプが考案され、後に審美性や回転沈下への配慮のために精巧なアタッチメントなども導入されました（図1）。しかし、クラスプを含めてその結果が臨床的にどのような経過を辿ったのかの報告は多くはありません。したがって使われてきた支台装置の真の目的は何なのかを理解することは叶わなかったと思われます。

図1 精密アタッチメント

欠損の分類

一方で欠損の分類は、古くからある欠損補綴のための基礎的要素でした。その代表は1928年に発表されたケネディーの分類です(図2)。この分類は片顎の歯列における、欠損の存在を分類したものです。いわばパーシャル・デンチャーを製作する際に片顎での力学的な思考の助けになるものでした。しかし、パーシャル・デンチャーの臨床は咬合支持の重要性に気づくことになり、アイヒナーの分類を採用することへと発展しました(図3)。つまり欠損歯列を上下顎で診るべきだという主張に発展して、副次的に支持機能の重要性も増すことになりました。

図2 ケネディーの分類

咬合力の負担様式に対する考え方

パーシャル・デンチャーの咬合圧負担は混合負担が一般的ですが、歯と粘膜では圧負担能力に差があります。なかでも遊離端欠損は最も問題のある欠損形態で、そのためにアルタードキャスト法などが考案されました。しかしこれらの臨床評価も十分に報告されぬまま、クラトビルやクロールによるより動きの少ない義歯の導入に移行したのです(図4)。さらにアイヒナーの分類が移入されたと同じ頃、コーヌス・デンチャーが紹介されてリジッドサポートという概念が広がりました。しかもこの強支持義歯が許される基礎的理論になったのが、ケルバーの論文でした(Korberら, 1962)(図5)。これ

図4 アイヒナーの分類

図4 動きの少ない義歯の導入

図5 リジッドサポートの理論的基礎

を機に義歯の支持機能優先は、その地位を確立したと言ってもいいでしょう。しかしながら臨床的にはコーヌス・デンチャーの導入は多くの支台歯の喪失にもつながりました。その多くは無髄歯の歯根破折ですが、有髄の支台歯も大きな力で経年的に無髄歯になり、同じ結末になることを経験しています（図6）。

支台装置にかかる力

欠損補綴は支台歯や顎堤に咬合力を負担させて成り立っています。その力は支台歯と支台歯に隣接する人工歯部に最も強くかかるものです（図7）。更に顎堤は力によって必ず吸収することも分かっています。そのため遊離端欠損の強支持デンチャーは、患者さんの条件をよく

考えたうえでの採用とメンテナンスが継続されなくてはなりません。

対策を探せ！

パーシャル・デンチャーの歴史は支台装置の飽くなき交換に依存するあまり、その臨床的検証が疎かになっていると思われます。机上の論理でなく、臨床の結果をもっと重視する姿勢が必要です。それによりもっと的確な適応が示されるはずです。そのうえでパーシャル・デンチャーにおけるインプラントの応用も視野に入れるべきでしょう。その時には最小の介入で支台歯が護られる適用法を考えるべきだ、と力説しておきたいと思います（図8）。

図6 コーヌス・デンチャーは支台歯の喪失をもたらした。

図7 遊離端欠損のリジッドサポートデンチャーの問題
支台歯に隣接した人工歯部分にも大きな力がかかる。

図8 デンチャーにおけるインプラントの応用も視野に入れるべきだろう。